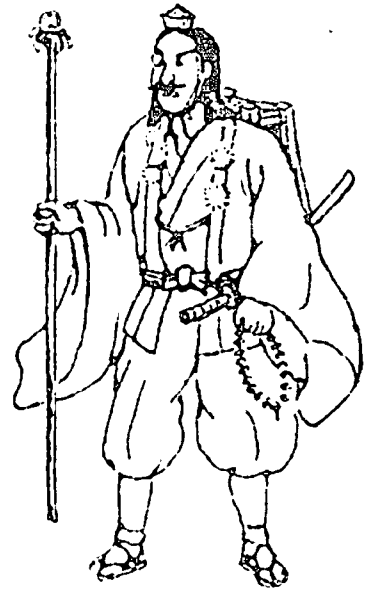


修 験 道

志谷市立大相模中學校 加藤 幸一

1. 修験者(山伏)

山岳信仰である修験道を修行する人。すなわち靈験(神仏が現わす不思議な働き)を得るために野山で修行する人たちのことをいう。多くは髪を伸ばし、兜布をかぶり、蓑を着け、また結袈裟をかけ、数珠や検扇を持ち、はばきを履き、笈を負い、金剛杖を突き、法螺貝を鳴らしながら野宿したりして野山をめぐり歩いて修行する。もとは太刀を帯びた。野山に野宿し、伏して修行することから「山伏」ともいう。



兜巾 --- 修験者がかぶった黒色の小さな布のずきん。頭巾とも書く。

蓑懸 --- 修験者が衣服の上に着る麻の衣。蓑懸衣。(右図)

結袈裟 --- 修験者が着ける輪袈裟(僧の着ける略式の袈裟)。細長

い三筋の切地を緒で結び重ね、為經のような物をかまに付けたもの。不動袈裟ともいう。

数珠 --- 百八の小さい珠を糸に貫いて輪にしたもの。

検扇 --- 松の薄板を並べて糸でとじた扇(扇子)。

はばき --- 旅行などの時、足に巻き付ける布製のもの。上下に紐をつけてしぼる。後世の脚絆にあたる。(右図)



笈 --- 修験者などが衣類・食器・仏具などを入れて背負う箱。つづらに似て四角に脚があり、戸によって開閉する。

金剛杖 --- 修験者の持つ、八角または四角の白木の杖。

法螺貝 --- 法螺貝の頭部に穴をあけ、吹き鳴らすようにしたもの。太く大きく響く。昔、修験者が用い、また、いくさで合図に使った。

修験者(山伏)が修行した代表的な山岳には、大峰山(山上ヶ岳、今でも、
わが国唯一の女人禁制を守っている)、金峰山(以上、奈良県)、熊野三山(熊野
三社のこと)、出羽三山(西弥陀如来にあてられる月山、大日如来にあてられる
湯殿山、観音菩薩にあてられる羽黒山の三山)、葛城山、立山、白山、戸隠、石
鎚山、大山、英彦山などがあり、蔵王権現などがまつられている。

蔵王権現...修験道の祖といわれる役行者が金峰山で修行中に感得したと
伝えられるもの。悪魔降伏の姿をした忿怒相をなし、石に三
鈷を持ち、左手は広げて腹を押し、右足をあげた形をする。

修験者(山伏)は山岳修行の結果、仏としての力を獲得したと称して、加持
祈禱(おまじないのこと、特に密教で仏力を受けて、病氣・災難などを除くた
めにする呪術。手に印を結び、口にまじないのことはである真言を誦し、独鈷
・三鈷・五鈷などの密教の法具を持って行なう)・調伏(仏力により、敵や悪
魔を降参させること、密教でみられ、降伏ともいう)・憑きもの落し(人に乗
り移ってその人に異常な言動をさせている霊や魔物を取り除くこと)などの呪
術宗教的活動をおこない、庶民の宗教生活に大きな影響を与えてきた。

修験者はまた、山岳の地理に詳しいことから、中世(鎌倉・室町時代)には
徒党を組んで威勢をはり、政治・軍事にも関係し、それに戦乱の際にはスパ
イとして従軍するなど、大きな役割を果たした。

なお、山伏姿で全国どこを歩いても不信がられないことから、義経・弁慶の
ように、身の安全をはかるため、山伏姿に変装する者もみられた。

2. 修験道

日本古来の山岳信仰が、天台宗・真言宗の両方の密教(ことばでは言いあら
わせない奥深い教え)によって組み立てられ、それに、道教(教えの中に仙人
の話がでてくる中国の民間信仰)や儒教(孔子を祖とする中国の伝統的な政治
・道徳の教え)・神道(日本古来からの神を崇拜する信仰)が加味され、白鳳
時代(645年~707年)に出て活躍した役行者を祖と仰ぐ仏教の一派、密教的
呪術(おまじない)や靈感(インスピレーション)・秘伝(秘密にして特別の

人にしか伝えない(事柄)が尊重され 護摩を焚き(仏前で又レの木などを燃やし 仏に祈る儀式)、呪文(まじない)を唱え 加持祈禱(病氣・災難などを除くためのおまじない)を行い、一方では 野山にはいり 難行・苦行をして 靈力(靈の持つ不思議な力)を修得する。

鎌倉時代初期に一つの宗教体系として独立し成立した。このころの中央の修験者は 熊野三山を中心とする天台系の本山派と 金峰山を中心とする真言宗系の当山派の二派にまとまっていた。一方、羽黒山・英彦山など諸国の山岳にそれぞれ独自の宗派が形成された。

3. 役行者

役行者(634年～701年?)は 白鳳時代(奈良時代の前)に 山岳を舞台として活躍した呪術者。修験道の開祖とされている。

本名 役小角(おんのおづの・えんのおづぬ・えんのしょうかく)。32歳の時、大和国 葛城山に入り、岩窟に孔雀明王を祀って30年間 ここで仏教を修行、苦行のすえ 靈力を得て いろいろな奇跡を行なったといわれる。

その後 吉野の大峰山・金峰山やさまざまの前人未踏の高山を次々と初登頂に成功し それらの山を開いて行を積む。そして山の靈気を地上にもたらし 人の心を清浄にするという靈力を示した。文武天皇3年の674年の時、彼の呪術は世間の人々を感わすものとされ 朝廷から弾圧され伊豆大島に流されたが 彼の靈力をもって島を抜け出し 富士山で修行したといわれる。大宝元年(701年)68歳の時、赦されて京都に帰ったが その後の消息は不明で いつどこで没したか知られていない。九州に下って修行したとか 唐に渡って仙人になったとかの伝説が残っている。役行者の行動には数々の奇怪な伝説が伴っており のちの鎌倉時代以後 修験道の開祖としてあ



(吉野山根本坊の堂文像)

がめられてくる。江戸時代の寛政11年(1799年)には朝廷より「^{しんげんだいご}神変大菩薩」との謚があたえられた。

役行者の像容は ^{けり}僧衣をまとい ^{ずきん}頭巾をかぶり 右手に ^{しゃくじょう}錫杖(僧や修験者の持ち歩く杖)、左手に ^{きんせん}経巻(お経の書かれた巻き物)あるいは ^{てつぱん}鉄鉢(托鉢僧が ^{こんじや}信者などから米などを受ける鉄製の容器)を持ち 足には ^{たかけた}高下駄を履いている。

道教の影響と思われるが 空を飛んだり 唐(当時の中国)の仙人になったという奇怪な話や葛城山と大峰山との間に橋を架けようとしたなどの超能力を持った人物といえる。

4. 江戸時代の修験道

江戸幕府は これまで全国各地を修行することが多かった修験道と地域社会に定着させ 本山派か当山派のいずれかに所属させた。この結果、村や町に定住した修験者は もっぱら加持祈禱、呪法など呪術宗教的活動に従事した。ちなみにみられた「おがみや」は この時期の修験者の影響を強く受けて出てきたものである。こうして 町や村人たちの宗教生活に深くかかっていたのである。例えば 村の神社(鎮守さまと呼ばれる)の別当や寺間の住職に修験者になることが多かった。こうして鎮守の祭り(村祭り)はもろもろ、村内に点在する祠(神を祭った小さいおやしろ)の祭りや 日持(前夜は村内外の人たちが集まって一夜を明かし〔これを「お籠」という〕、日の出を待って行進)の日に 各家を祈禱(神仏に祈ること)したり 盆火を焚いたりした。また月待(月齢が13日、17日、23日などの夜に 人々が集まって 月の出るのを待って 供物を供え、飲食を共にする行事)や庚申待(60日に1回くる庚申の夜に人々が集まって 仏家では帝釈天や青面金剛、神道では狼田舎を祭って 寝ない徹夜する行事)などを主催して 日本の伝統的信仰や習俗に深くかかっていた。修験者はまた屋敷内の神を祓う家祓忌や虫祭(祈りくまじない)の功德によって田畑などの害虫を避けようとする(こと)・雨乞(ひでりの続いた時に 神仏に雨が降るように祈ること)・風祭(風を鎮めるため立春から数えて二百十日の前後に行う祭)・安産祈願・厄年祓(厄年になった人の厄を取り除

くこと、男の厄年は25・42・60歳、女は19・33歳)など村と人にかかわる加持祈禱を行ない、時に憑き物落し、調伏を好んで行なった。修験者は庶民の思いもかけぬ病疫や災厄は邪神邪霊の祟りや憑き物によると説明し、それを取り除く力を持つ者として村人の信頼を獲得したのである。こうして修験者は山岳で修行を積みその身そのまま仏となって諸霊を自由にあやつる超能力を得て村人たちにその超能力を顕示した。火渡りをして火災を背負っている不動明王そのものようにふるまったりもした。

修験者が行なった芸能でもこうした面がみられる。修験者は自己の修行や霊力を示す物語を説経節や祭文あるいは説経祭文(これらは一種の語り物歌謡である)に託して語り 娯楽の少ない村人の関心をひき 修験者の力を信じさせたのである。(『説経』を「お説教する」の『説教』と混同しないこと)

説経節…説経とは僧が人々に経文の趣旨を説き聞かせることをさしていたがのちに世俗的な題材を扱って三味線に合わせて節をつけおもしろおかしく語った一種の語り物歌謡に通俗化した。操人形劇とも提携して興行化する。説経、説経浄瑠璃とも言う。

祭文…祭りの時神前で神の霊に告げることばであったものがのちに世俗化して門付芸人(人の家の門口で芸をしお金や食べ物をもって歩く芸人)がおこなう一種の語り物歌謡となった。心中事件などを題材としおもしろい節付けで読みあげられ、錫杖・三味線などを伴奏に用いられた。

説経祭文…説経が歌謡化された説経節が山伏の祭文と結びついてできた江戸時代の語り物歌謡

修験者は大峰山などで修行した時などお礼をうけて村人に配布したり、薬や茶などの物資の流通の世話をし封建的な村落と外部を結ぶ役目をした。彼らは村内の有力者であり政治にたずさわったり寺子屋経営をしたり、宗教以外の面でも村人の生活の指導者として活躍する者もいた。

修験者に能発された村の人々が「講」と呼ばれるグループをつくり、山岳修

行を行なったり 山の寺院・神社に参詣したりするようになった。例文は熊野講(熊野三山)・山上講(山上ヶ岳・大峰山ともいう)・出羽三山講・彦山講・富士講(富士山)・御蔵講(木曾の御蔵山)・石鏡講など 多数の講が結成され、民衆の信仰登山が活発となっていった。

5. 明治以降の修験道

明治維新(1868年)の神仏分離令(神道と仏教とが習合されていたものをはっきりと分離させた命令)、それにつぐ廃仏毀釈(国民の中に生まれた極端な廃仏運動で 全国的に寺院・仏像などが破壊され 仏教界に大きな打撃を与えた)の影響で 修験道も弾圧された。そして明治5年(1872年)、修験道は廃止され 本山派・当山派の修験者は それぞれ天台宗・真言宗に所属させられた。現在は 真言宗御室派(三寶院)と金峰山修験本宗(金峰山寺)・本山修験宗(聖護院 京都にある天台宗寺門派の寺院)がある。

〔主に参照した本〕 S60・1・3

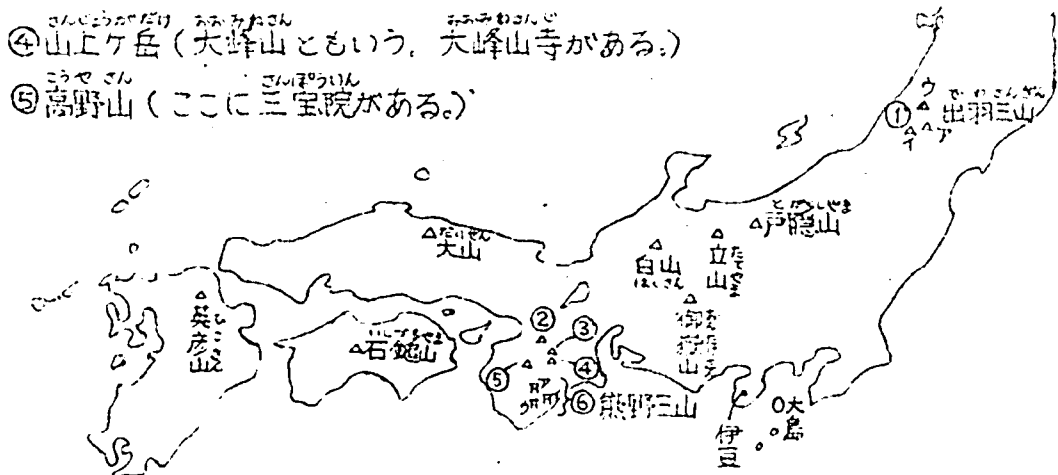
広辞苑(岩波) 国語中辞典(角川) 新明解国語辞典(三省堂)

ジャポニカ(小学館) 日本石仏事典(雄山閣)

社会科のための民俗学(東京法令出版) 日本国語大辞典(小学館)

主な修験道ゆかりの地

- ① 出羽三山 ア.月山 イ.湯殿山 ウ.羽黒山 ② 葛城山(役行者修行ゆかりの地)
- ③ 吉野山(金峰山寺がある、金峰山寺とは本来、山上(大峰)、山下(吉野)に散在していた)
- ④ 山上ヶ岳(大峰山ともいう、大峰山寺がある)
- ⑤ 高野山(ここに三寶院がある)



⑥ 熊野三山(本宮(ア)・新宮(イ)・那智(ウ)の三つの大社をさす)